

嫁を寝取られた男を狐
娘が癒してくれるよう
な話

春雨.

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

じゅんあいもの

小説家になろう様にも投稿しています。

第
1
話

目

次

第1話

俺の名前は山井幸男。地元の企業で働く35歳中年オヤジだ。
いつもより早く仕事を切り上げた帰り道。

俺の足取りは普段と違つてとても軽いものであつた。
しかしそれは残業をしなかつたからでなく――

「あいつ、喜んでくれるかなあ」

今日は愛する妻、琳子の誕生日だからである。

そして同時に、結婚してちょうど10年経つた日もある。

そんな記念すべき日、俺は彼女にサプライズパーティーをしかけようと考えていた。
いつも通り仕事で帰るのは遅くなる、彼女はそう思つてゐるはずだ。
実際、家を出るときにそう言つたしな。

きっと、今頃「記念日のこと忘れちやつたの?」と思つてゐることだろう。
そして、不安に思つてゐるはずだ。

そんなときにはサプライズで祝われたら?

絶対に驚くはずだろう、今まで生きていた中で一番くらいに。

そんなことを考へてると、いつの間にか家の前に。

より彼女を驚かせようと、ばれないようにこつそりと家の中にあがる。

そして、音を立てないよう抜き足差し足で彼女がこの時間いるだろう、寝室の前に立つ。

そして勢いよくドアを開け、俺は彼女にただいまと声をかけようと――

聞こえてくるのは喘ぎ声。そうだ、声をかけないと。喘いでるのは俺の妻。早く声をかけるんだ。目の前に広がるのは何度も見た妻の身体。サプライズをしなければ。今まで見たことのないほどよがり狂う妻。結婚10年目で誕生日。そんな記念日にふさわしいお祝いをしなければ。なんで妻が喘いでいるんだ？そりやあセックスしてるからだろ。今までの10年間を祝う記念日。相手は誰だ。彼女の夫は俺だけだ。これらの夫婦生活に幸あれと願う記念日。でも俺は一人、ここにいる。じゃあ相手は？夫婦円満で子供もいて順風満帆な結婚生活を送ってきた。それを祝う記念日なんだ。妻にはあつと驚いてもらわないと。どうして妻は俺以外の男とセックスしているんだ？浮気？彼女が愛しているのは俺と娘で。なんでそんなにうれしそうなんだ。俺が愛してるのは彼女と娘で。愛してるんじやなかつたのか？

記念日を祝うために彼女に似合う首飾りを選んできたんだ。行為を続ける彼女の首

には男の腕が巻き付いている。俺は俺は俺は俺は俺は——

「おや？ 兄さん帰つていたんだね」

その声で俺の思考は現実に引き戻される。

妻を抱いていた男は、俺の弟の愛斗だつた。

「どういうつもりだ、これは……」

「ア、・アナタ?!こ、これはその……」

「フフフ。見ての通りだよ、兄さん。

兄さんの妻と寝ているのさ」

「なんでこんなことをしたんだ……！」

「兄さんと義姉さんは全然つり合いが取れてないよう見えたからね。

だから僕が貰つてあげようとおもつてね」

その言葉を聞いたとき、俺は愛斗を殴つていた。

いや、こいつには一発じや足りない。もつと殴らないと……。

「やめて！ アナタ！」

それを止めるために琳子が俺たちの間に入つてくる。

「なぜだ！ 琳子！」

「確かに私たちは許されないことをしたかもしねないわ！」

でも、だからといって目の前で愛する人を殴られるのを許容なんてできないわ！」

「義姉さん……」

「だから、ごめんなさい。この家から出て行つて」

そう告げる彼女の目は、まるで親の仇を見るような目であった。

それを見た俺は何も言うことができず、惨めに家を去るのであつた。

あれから何時間たつたのだろうか。

空からは、まるで今の俺の心境を表すかのように、大粒の雨が降り注いでいる。
そんな土砂降りの中、俺は宛所もなく歩いていた。

「いたつ」

足を縛れさせ転んでしまう。

痛みが身体を襲う。痛い。痛い。痛い。

心が痛い。

俺は起き上がることができず、ただただ雨に打たれるのであつた。
降り注ぐ雨が不意に途切れる。

「大丈夫かの？」

次第に薄れていく意識の中、視界に映つたのは狐のような耳と尻尾を持つた巫女であつた。

「知らない天井だ」

目を覚ますと、俺は知らない部屋の中にいた。

「ここはどこなのだろうと辺りを見回す。

どうやらここは和室の中らしい。

そんなことを考えていると、急にふすまが開く。

「む、目を覚ましたのじやな」

「君は……」

入ってきたのは、意識を失う前に見た狐耳の少女であつた。

「儂の名前はマナ。

この神社の主みたいなものじや」

「マナ……さん。

アナタが私を助けてくれたのですか？」

「ああ、無理に敬語を使う必要はないぞ。

堅苦しいのは苦手じやからの」

「分かったよ、マナ。

それで俺のことを助けてくれたのって……」

「ああ、儂じや。

ウチの神社の前で行き倒れていたからの。

あのままにしても置けなかつたしウチに連れてきたんじや」

「ありがとう、マナ。

助かつたよ」

「よいよい。困つたときはお互い様じやしの」

そう言いながら、照れ臭そうにそつぽを向く彼女。

そのしつぽは嬉しそうに揺れていた。

「しかし、幸男よ。お主はなんであんなところで行き倒れていたんじや？」

「ああ、実は……」

「て、あれ？」

俺、名前を教えたつけ。

疑問を覚えながら、俺は彼女に自分が行き倒れた経緯を話すのであつた。

「なるほど。それは辛かつたのう」

そう言いながら、彼女は俺のことを急に抱きしめてきた。

「マナさん!?」

「よい、今は何も考へるな。

僕の胸ならいくらでも貸してやる。

だから、辛い気持ちは全部ここで吐き出してしまおのじや」

そう言つて、彼女は僕の心を癒すようにゆっくりと頭をなでるのであつた。
俺は、そんな彼女の胸の中で胸に詰まつたものを吐き出したのであつた。
彼女は俺を抱きしめながら、慈しむように頭をなで続けるのであつた。

「おや、泣き疲れて眠つてしまつたようじやの。

よい、今はここでゆっくり眠るのじや。

大丈夫、もうお主を苦しめるることは絶対に起きん。

安心して眠るのじや、幸男よ……。
そう、僕の愛しい愛しい兄さん……
』